

菊地英里香

はじめに

近代国家の行使する権力は、単なる実力ではなく、一個のまとまりをなしている諸規則の名において、またそれに従って適用される実力である<sup>1</sup>。法に基づき、しかも同時に法の創造者でもあり、したがって他の権力に従属しない、そのような最高にして独占的な権力という〈近代的な〉観念を規定したのがジャン・ボダン（1529/30－1596年）に他ならない。主権という観念は、それ以前の法学的、神学的蓄積とフランス王権の発展についての研究をもとに練り上げられたものであり<sup>2</sup>、「絶対的で永続的」な権力という定義は「公権力」の理論を導き、そこに近代国家の道筋が開けてくるのである。このような要約からは、ボダンは近代的あるいは世俗的な政治理論家だという印象を受けることだろう。だが、彼の政治学のみならずすべての分野の学究を根底で支えているものは、神とその力への畏敬であるということを見逃すべきではない。

自然界に神の作用を見るボダンの思想は一貫して宗教性に満ちている。ボダンによれば、世界は神の摂理によって運行されており、自然界、すなわち宇宙は神の創造作用そのものと解されるがゆえに、完全で善きものであり、調和のとれたものである。万物は神の完全さ、善、美に与る程度に応じて、つまり上下の位置に応じて支配・服従の階層秩序をなしている（神—天上界、善霊・悪霊—人間—動物—植物—無生物）。このような宇宙観を前提として、さらに宗教戦争の渦中という時代状況も踏まえつつボダンの著作は読み解くべきものである。

---

<sup>1</sup> A.P. ダントレーヴ『国家とは何か』石上良平訳、みすず書房、1972年、p. 118.

<sup>2</sup> Simone Goyard-Fabre, *Jean Bodin et Le droit de la République*, 1989, p. 88.

M.C.Jacobsen, *Jean Bodin et le dilemme de la philosophie politique modern*, 2000, p.134.

ボダンの国家論における神的な秩序と世俗の秩序は、前者が後者を支配するという形をとりつつも、絶妙な形で交錯し有機的に結びついている。例えば、ボダンが国家を構成する最小単位を家に求め、家における家父長は国家にとっての君主と同じ立ち位置にあるとした。家父長の私的所有権をめぐっては、公的なものの成り立つ基盤であるという財政の構造分析からくる要請と神法によって、これが十分に尊重されるべきだとした。本稿では、まず私的財産権の保護にかかわるボダンの言動を中心にボダンの思惟様式の特徴を明確にする。次にボダンの徳論の要点を把握したのちに、徳へ至るために必要とされる教育についての見解を詳らかにし、国家を維持していくためにどのようなものが国民に備わるべきだと考えられていたのかを明らかにしたい。

## 1. ボダンにおける国家：私的財産権の問題をめぐって

ボダンにおいて、国家の秩序は神の支配する宇宙の秩序と一致するものとして考えられている。宇宙の秩序の頂点に君臨する「一者」である神のイメージは国家においては君主に投影されている。同時に、神のもつ権限同様に王のもつ主権も不可分であり、神が自らの意志で法を作り出すのと同様に、君主の命令が法律であるとボダンは規定した。ボダンは神と君主を類比的にとらえているものの、両者のあいだには決定的な差異がある。つまり、神はその上位にいかなるものももたないが、君主の上位者としては神が存在するという違いである。このことは、絶対的である主権を制限する第一のものに示されている。ボダンは主権が以下のものにより制限されると述べている。すなわち、神法と自然法、王国基本法（サリカ法に基づく王位継承、王領の譲渡禁止）、私的所有権によってである。

神法と自然法について、ボダンは『国家論』（1576年）の中でそれがどのようなものか定義することはなかった。おそらく彼にとっては説明不要のわかりきったものだったからであろう。ボダンは神法と自然法を繰り返しセットで用いることが多い。神法とは十戒を中心とした旧約聖書に示された神の教えであり、自然法とは『普遍法の分割』（1578年）の定義によれば、「我々各々が種の起源より生得のものとして持っている常に公正で善なるもの。これは神に対する信仰、同胞への憐れみ、感謝に値す

るものには感謝を、悪人には復讐を、各人に正義を命じる」<sup>3</sup>とされる。自然法には神の意志が示されているため、当然それは神聖なものとして尊重されねばならない。自然法は神を頂点とした宇宙のヒエラルキーを構成し、——政治もそこに組み込まれているのだが——、このヒエラルキーを人間に知らしめ間違いなく従うように導くものが神の教えである十戒と人間の理性である<sup>4</sup>。ボダンによれば、人間は理性に与っており、自らを律して神の命令を聞き分けることができる。それと同時に人間は本性的に自由を与えられており、自らの自由意志によって自然法に反した振る舞い、すなわち暴力行使のような理性に反する行動をとることもできる<sup>5</sup>。人間が神の意志に一致した正しい行いを遂行していくためには理性の陶冶が必要となり、これは教育の課題となる。

神法と自然法による主権の制限という問題は、私的所有権の尊重の問題にもかかわっている。私的財産の不可侵は神が命じたことであるとボダンは言う(十戒の第十戒)。神法は声高らかにかつ明確に、他人の財産を奪うことのみならず、それを渴望することが違法であると宣言している<sup>6</sup>。国家の基礎を形成する家が健全に運営されていくためには、私的財産の所有が保障される必要がある。家は国家の維持のために必要な費用を分担しなければならず、それぞれの家が財政的に安定した上で秩序正しく営まれていてこそ、国家も正常に機能するからである。

ボダンは公的なものが存在する前提として私的なものの存在を強調し、国家を構成する最小単位は家であり、正しく統治された家は国家の統治の真のモデルとなると述べた。ボダンの定義によると「家とは家父長権に服する多くの従属的な人々と彼の固

---

<sup>3</sup> Jean Bodin, *Exposé du droit universel* (traduit du latin par Lucien Jerphagnon), Paris, 1985, p. 15.

<sup>4</sup> Jean Bodin, *Les six livres de la République*, Paris, 1986 (réimpression de l'édition de 1593), t. I-3, pp. 51-52. なおボダンにおける自然法については以下の論文がある。Janine Chanter, « L'Idée de Loi Naturelle dans la République de Jean Bodin », dans Horst Denzer (éd.), *Actes du Colloque international Jean Bodin*, Munich, 1973, pp. 195-212.

<sup>5</sup> この点に関しては以下を参照。拙稿「ボダンにおける主意主義——妖術師撲滅論と国家論の基盤として——」, 『中世思想研究』第56号, 2014年, pp.49-63.

<sup>6</sup> Jean Bodin, *République*, t. I-8, p. 23.

有なものに対する正しい統治である」<sup>7</sup>。「固有のもの」というのが私的財産に他ならず、国家の目的はそれを各人に帰することである。ボダンが各人がその財産を享受して自由に用いることを認めており、主権者といえども人々の同意なしには課税や公共の土地に手をつけるような行為を行ってはならない。ボダンは「臣民から思うがままに税を取り立てることも、他人の財産を奪うこともこの世の君主の権力にはない」と述べた<sup>8</sup>。

ブロワの三部会において彼のとった行動は、このような自説に忠実なものであった。ブロワの三部会の顛末については清末の詳細な論述があるため<sup>9</sup>、ここでは要点だけを記すにとどめる。ボダンは1576年に開かれたブロワの三部会にヴェルマンドワの第三身分の代議員として参加し、精力的に活動した。ボダンは、戦費捻出のために国王が要求した新たな税の創設や王国の領土譲渡に一貫して反対の立場をとった。宗教的寛容を説き、国民の平和的共存を望むボダンからすれば、戦争のための資金作りを許すことなどできなかった。このような動機と、私的財産を保護するという三部会に託された権利に基づいてボダンは王の課税に反対した。例えば、1484年のトゥールの三部会においても人頭税の不平等、役人の過剰、重税は非難され、国家はその領域内の歳入で維持されるべきであり、税の徴収には三部会の承認が必要とされていた。シャントルルも指摘しているが<sup>10</sup>、主権論と三部会の財政への介入は矛盾するものとは言えない。なぜならば、先に述べたように私的財産は家にとって根源的な権利であり、国家はこれを保護しなければならないからである。課税をするということはこの神聖な権利を侵すことに他ならず、税を払うべき側の合意が必要となる。三部会は主権者

---

<sup>7</sup> *Ibid.*, t.I-2, p. 39.

<sup>8</sup> *Ibid.*, t.I-8, p. 201.

<sup>9</sup> 清末尊大『ジャン・ボダンと危機の時代のフランス』木鐸社, 1990年, pp. 223-245.

<sup>10</sup> Laure Chantrel, « Une relecture des travaux de Jean Bodin sur la fiscalité à partir des comptes-rendus des Etats généraux de 1560 à 1588 », Actes du Colloque Jean Bodin, dans Gabriel-André Pérouse, Nicole Dockès-Lallement et Jean-Michel Servet (réunis par), *L'œuvre de Jean Bodin, Actes du colloque de Lyon, janvier 1996*, Paris, 2004, p.340.

を支配しているのではなく、主権者が自然法を尊重して権力を行使するための手段として機能しているのである。

ボダンが最善だと考えていた王政あるいは正当的君主制は、臣民が君主の法律に服し、君主が自然法に服して、臣民の自然的自由と財産所有を保障する統治である<sup>11</sup>。私的財産権をめぐるボダンの言動からは、政治学者としての彼のバランス感覚の秀逸さがうかがい知れる。私的財産権の保護を究極的に支えているものは神法、自然法に他ならず、これには君主も臣民も絶対服従しなければならない。財産の問題という極めて世俗的な問題に聖なる権威を持ち出してくるというやり方を、後者を前者のために都合よく用いていると解釈することもできるであろう。そのような経典の利用の仕方は今日に至るまで存在してもいる。だが、敬神な人間であったボダンにとって聖書、特に旧約聖書はまさに神の言葉、命令であり神聖なものであった。現実主義的な側面と敬神が彼の中では複雑に絡み合っており、そこにある種の調和が生み出されていたのである。

ボダンが最重要視した神法と自然法に君主を筆頭として全人民が従うためには、当然敬神に支えられた宗教というものが必要である。「世俗国家」を目指したと紹介されることも多いボダンであるが、彼の国家論は神への信仰、あるいは宗教抜きでは語れない。国家において宗教は可能であるならばひとつであることが望ましいとボダンは考え、そのもとで国民が友愛に基づいて生活することが理想であり、いくつかの宗教に国民が分かれてしまっている場合には、互いに認め合い平和的に共存するというのが彼にとっては次善の策であった。

## 2 ボダンにおける道徳——アリストテレス説への批判を中心に

ボダンによれば、すべてのものにとっての最高善はあらゆる善の源泉である神に他ならない。最高善、すなわち神の享受は、神への愛により、神への愛は神認識により

---

<sup>11</sup> Jean Bodin, *République*, t.II-3, p. 43.

もたらされる。神認識は神の御業、法、裁きを学ぶことにあり、この学びは広く分かち与えられた光に由来し、これは徳を積み重ねた者たちにおいてより大いなるものとなる。

ボダンが徳を「魂において獲得される褒められるべき美点」、「誠実な行為によって獲得される褒められるべき習慣」<sup>12</sup>であると定義する。一方の悪徳は「徳の欠如」であるととらえられている。徳の対立物である悪徳が「魂において獲得される非難すべきもの」という徳の定義を反対にしたものにはならないのかという問いには、徳と悪徳は対立するものではないとボダンは答える<sup>13</sup>。悪が善に対立するものではなく善の欠如に過ぎないのと同様に、悪徳は徳の欠如に過ぎないとされる。欠如や不在は習慣や獲得とは相いれず、すべての悪しきものは善の欠如、不在でしかないため習得や獲得とは相いれないのである。

徳の源泉が神に由来し、人間はそれを容易に育むことができるとボダンが考えていたことは、以下の記述から明らかである。

「自然は我々に悪徳を植え付けることなどしなかった。だから賢者は自分が善き魂と共に善く生み出され、澄んだ穢れのない体を見つけたと言っている<sup>14</sup>。すべての古代ヘブライ人とアカデミア学派の者たちは、我々の魂にはすべての徳の神的な種子がまかされていることは確かなことだと認めていた。もし、我々がそれらの発展のために精進するなら、それらは我々をほぼ幸福な生へと導くことができる。その証拠に、我々は何も学んでいない未熟な精神がただちにすべての知識の原理と基盤を理解するのを

---

<sup>12</sup> Id., *Le paradoxe de Jean Bodin Angevin, qu'il n'y a pas une seule vertu en mediocrité, ny au milieu deux vices*, (trad. du Latin en François, augmenté en plusieurs lieux), 2012, réimpression de l'édition de 1598, (*Paradoxon, quod nec virtus ulla in mediocritate, nec summum hominis bonum in virtutis actione consistere possit*, 1596), p. 44.

<sup>13</sup> *Ibid.*

<sup>14</sup> 『知恵の書』 8:19-20.

見る。まったく同様に、大地は何の苦も無くおのずから、無数の植物、金属、鉱物、宝石を孕み、海は魚を生み出し、魚は天の影響によって養われている。このように魂の中には無数の美しい知識と徳がまかれており、これらは神の作用を注がれ、二つの実を結び、思慮と知識の木に育つ。だが思慮の実に留まるべきではなく、もっと遠くまで、命の実、すなわち知恵の実にまで至らねばならない<sup>15</sup>。」

アリストテレスは徳には知性的な徳と道徳（倫理）的な徳があるとしたが、ボダン はすべての徳は知性的なものであるとする。まず、アリストテレスの見解を見ておく。アリストテレスは魂のある部分は「ことわり」なき部分であり、ある部分は「ことわり」を有する部分であるとした<sup>16</sup>。魂の「ことわりなき部分」のうちには、広く共通の植物的な能力（食養を摂取し生育させる力）があると想定されている。この能力は人間も含めた動植物に等しく存在する。この部分は人間の徳とは関係がない。この他に、人間の魂には同じく無ロゴス的でありながらある仕方ではロゴスにあずかっていると 思われる部分、すなわち「欲情的な部分」ないし「欲求的な部分」がある。この部分は「ことわり」（ロゴス）に従う限り、ある意味において「ことわり」を分有する。アリストテレスは、「父親や親しきひとびとの「ことわり」を分有する（彼らのことばに従う、彼らのいうところをききわける）という場合におけると同じような意味であり、数学的対象についての「ことわり」を有する（＝それについての認識をもつ）という場合におけるごとき意味とは異なる」と述べている。道徳的な徳はこの分別に聞き従う魂の部分にかかわる。一方、自らのうちに「ことわり」を有する魂の部分は、知性的な徳にかかわる。智慧や知慮などは知性的な徳に、寛厚や節制などは道徳的な徳に属するものである<sup>17</sup>。

---

<sup>15</sup> Jean Bodin, *Paradoxe*, pp.64-65.

<sup>16</sup> アリストテレス『ニコマコス倫理学（上）』高田三郎訳、岩波書店、1971年、p. 51.

<sup>17</sup> 同書、pp.53-54.

ボダンはすべての徳は知性的な徳であると述べ、魂の劣った部分、すなわち分別に聞き従う部分に道徳的な徳があるという考え方を退ける。なぜなら、人間には一つの魂、すなわち知性的な魂しかないからであり、そこから当然の帰結として徳には知性的な徳しかないとボダンは言う<sup>18</sup>。たとえ人間に魂が二つあったとしても、劣った方の魂にはいかなる徳も帰すことができないとも彼は述べる。その理由は、獣的な欲求に命令できるのは知性的な魂だけだからであり、服従は隷従的かつ必然的なものだからである。したがって、有徳で立派なすべての行為への賛辞は、魂の優れた部分に関連づけられねばならない。魂の劣った部分に命令して服従させることは、人を獣のように服従させることにしかならず、獣的な魂は理性の命令に従ったとしても、正当な報酬を得ることができない。なぜなら、単に強制されて従ったものにはいかなる報酬も称賛も値しないからである。

「もし徳が獣的な魂に属するとするなら、これほどあからさまに馬鹿げたことは他にないだろう。なぜなら、徳に報酬が与えられず、罪に罰が与えられなくなってしまうからだ。〔中略〕すべての哲学者の総意によれば、獣的な魂は滅ぶべきものであるが、報酬と罰は不滅のものである。したがって、これらは彼らが滅ぶべきものと認めている獣的な魂に適したものではない。そして獣的な魂への報酬もその大罪への罰も知性的な魂に帰すべきではない<sup>19</sup>。」

ボダンによれば、知性的な魂は死後に肉体と分離した後も生き続ける。したがって、不死ではない獣的な魂に不滅のものである報酬や罰を与えるのは、両者の性質を考えるとアンバランスだということになる。また、ボダンは魂を肉体的なものと考えていた。これは以下のように演繹される。彼によれば天使も悪魔も肉体的な存在である。人間の魂が活着している間は肉体と結合していたという事実からは、人間の魂は価値の

---

<sup>18</sup> Jean Bodin, *Paradoxe*, p. 49.

<sup>19</sup> *Ibid.*, pp. 50-51.



点で天使の魂よりも劣るとせねばならない。したがって、人間の魂はどうみても肉体的なものであると考えられる。さらに、無限で非肉体的な存在は神だけしかありえないという立場からも同様の帰結となる。

人間の魂が肉体的なものでないとするならば、道徳的な問題も生じてくるとボダンは考えていた。なぜなら、そのような場合には罰を受けるべき邪悪な者たちに対して「苦しみ」の体験という彼らに値する罰を受けさせることができなくなり、善人たちにはふさわしい報酬を与えることができなくなってしまうからである<sup>20</sup>。悪人たちには苦しみを味わわせるべきだという言葉からは、魔女たちに厳罰を説いていた裁判官としての彼の姿が浮かび上がってくる。国家が善人に報酬を与え悪人を処罰することは、国家を維持するためにボダンが最重要だと考えていたことである。そして、神もまた善人に報酬を与え悪人には罰を下す。ボダンは宗教戦争という惨禍が悪しき統治者に対する神からの報復であるとも考えていた<sup>21</sup>。

ボダンは徳には瞑想の徳（知恵と知識）と行為の徳（思慮と技術）があるとした。『出エジプト』第31章で神がベツアルエルに与えたものによって、ボダンはその序列と内容について述べている。まず、ベツアルエルは聖霊に満たされこの世で人間が得られうる最もすばらしい贈り物である預言の力を与えられる（預言は徳の範疇にはない）。それから、知恵が与えられる。知恵は神の愛、神への純粋な奉仕についての認識にあり、これによって人は敬神と不敬神のあいだの違いを知る。次に知識が与えられる。これによって自然界のものとこの世のあらゆる部分についての知識を手にするにより、真偽を判断する試金石を手にするのである。それから思慮が挙げられる。思慮はすべての徳の女王、人間の生活の主であるとされ、善と悪、誠実と不誠実の判断を下す。徳の女王という表現が出てきたが、道徳的な徳である寛容、節制、正義は

---

<sup>20</sup> Id., *Le Théâtre de la nature universelle*, traduit par François de Fougerolles, 1597, p. 751. この作品に関しては、以下の優れた研究がある。Anne Blair, *The Theater of Nature: Jean Bodin and Renaissance Science*, 1997.

<sup>21</sup> Jean Bodin, *De republica libri sex*, 1591, Epistola. ボダン自身の手による『国家論』のラテン語版（初版は1586年）には、多くの増補と改定が含まれている。詳しくは清末尊大、前掲書, pp. 296-302.

思慮のもとに配置されている。最後に、技術について述べられる。技術はすべての人間の手のかかわる仕事であり、有益なものと無益なものを判断する。

ここで注目しておきたいことは、アリストテレスを批判してすべての徳は知性的な徳であるという立場をとったボダンが、道徳的な徳について語っている点である。この矛盾は意外と大事なことのように思われる<sup>22</sup>。クージネも指摘しているが、ボダンの思考システムにおいては、絶対者とそれに従属するものとの間には究極的な不均質性が看取され、その根源にあるものは神と被造物との関係である<sup>23</sup>。例えば、主権者と臣民との関係も同様のものであり、唯一にして不可分な主権者に対して臣民は多様で厳密に階層化されたものの集合である。国家と政体に関しても同様で、国家は常に一つでしかありえないのに対し、その主権を保持する政体は多様な形態をとる。ボダンにとって知性的な魂も絶対領域に属するものである。すべての徳は知性的な魂に由来するため、知性的な徳だとボダンは言う。徳の源は一つであるが、徳はさまざまなかたちで発現する。そこには、伝統的に道徳的な徳と呼ばれてきたものも含まれる。ボダンが道徳的な徳などないと断言した理由は、知性的な魂の唯一性を擁護し強調するためだったと考えられる。ボダンの政治理論の中核をなしていたものと同じ構造の論理が、徳論においても用いられていたと言えよう。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の第2巻第6章において以下のように述べている<sup>24</sup>。徳とは情念と行為にかかわり、「ことわりによって、また知慮ある人が規矩とするであろうところによって決定されるごとき、われわれへの関係における中庸」において成立するところの、「われわれの選択の基礎をなす（魂の）状態（プロアイレティック・ヘクシス）にほかならない」。そしてこの中庸とは、「二つの悪徳の、すなわち過超に基づくそれと不足に基づくそれとの間における中庸の謂い」であり、

---

<sup>22</sup> Marie-Dominiaue Couzinet, «La philosophie morale de Jean Bodin», dans *L'Œuvre de Jean Bodin, Actes du colloque tenu à Lyon à l'occasion du quatrième centenaire de sa mort (11-13 janvier 1996)*, Paris, 2004, p. 381.

<sup>23</sup> *Ibid.*, pp. 381-382

<sup>24</sup> アリストテレス, 前掲書, pp. 71-72.

「実体に即して言えば「中庸」（メソテース）であるが、しかしその最善性とか「よさ」とかに即していうならば、それはかえって「頂極」（アクロース）にはほかならない」。例として次のようなものが挙げられている。恐怖と平然に関しては勇敢がその中庸にあり、財貨の贈与ならびに取得に関しては、その中庸は寛厚であり、その過超と不足は放漫とけちである。

アリストテレスはここでは「倫理的な卓越性」、すなわち道徳的な「徳」についてのみ語っている。すなわち、「知的卓越性」、すなわち知性的な徳の場合は、ここにいう「中庸」の論は意味をもたないのである。また、彼は「あらゆる行為、あらゆる情念が中庸をゆるすわけではない」とも述べている。すなわち、悪意・破廉恥・嫉視などの情念、姦淫・窃盗・殺人などの行為はそれ自体劣悪であるがゆえに非難されるのであり、その過超あるいは不足が非難されるのではなく、これらに関してはいかなる仕方でそれをなそうと誤っているのである。たとえば、姦淫は常に悪しきものであり、然るべき女を相手に、然るべき時に、然るべき仕方で姦淫するかどうかということの上に姦淫の良し悪しがかかっているわけではない。

徳が両極端の悪徳の間にあるとするアリストテレスの説もボダンも批判する。なぜなら、すべての徳は知性的な徳であり、「いかなる知性的な徳も中庸にはなく、悪徳の間にはない。したがって、中庸にある徳などまったくない」<sup>25</sup>からである。アリストテレスの学徒たちは師の説に従って、知性的な徳を除外して道徳的な徳にのみ中庸を設定しており、すべての徳は知性的な徳であるということから考えれば、「ないものためにそこに中庸を探している」とボダンは述べる。さらに、彼らの言うように道徳的な徳というものがあると仮定しても、徳は二つの悪徳の間になどないとボダンは言う。なぜなら、自然の美しい原理によれば、二つのものが一つのものに対立するということは決してないからである。暑さには寒さが対立し、乾燥は対立しない。黒には白が対立し、緑は対立しない、というように。そうでないとしたら、この世界は破壊され転覆してしまうだろう。もし道徳的な徳が二つの悪徳のあいだにあるとしたら、二つのものが一つのものに対立することになってしまう。アリストテレス

---

<sup>25</sup> Jean Bodin, *Paradoxe*, p. 54.

は悪徳が悪徳に対立するということのみならず、概して悪は善に対立するとも述べていた。ボダンが悪が善の欠如でしかないと考えていたため、当然このようなアリストテレスの考え方は否定される。同時に、「悪は無限定なものに、善は限定されたものに属する」というピュタゴラス学派の見解もボダンは斥けた。なぜなら、この説をとるならば悪徳は無限にあることになり徳の数を凌駕し、さらには無限の悪徳のあいだで徳はほとんどなくなってしまい、中庸としての徳などなくなるからである。

デルフォイの神殿の扉に刻まれていた「過度になすべからず」という中庸を説くかのような格言を、ほとぼしる生理的あるいは物質的な欲求を理性によって制御することを求めた言葉だとボダンは解釈する。さもないと、もし中庸がすべての物事において称賛に値するのであれば、「<程よく不品行であれ>などと言わねばならなくなってしまう」<sup>26</sup>。ボダンは中庸がまったく自然に適ったものではないとする。なぜなら、火は半分だけ熱することなど決してなく強く燃え上がり、太陽も中途半端にではなく最大限に輝きを放っているからだ。このように被造物はその属性を最大限に示すものであり、徳というものは自然にかなったものであるため、その力は中途にではなく極限において示される。そして、何よりも神自身が我々に次のように命じていることを想起すべきである。「我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽し、魂を尽し、力を尽して、あなたの神、主を愛しなさい」（『申命記』6:4-5）<sup>27</sup>。このように神は極限の愛を求めており、そこからこの世で最もすばらしい徳は中庸にではなく、全身全霊を傾けた極限のうちにあると考えられる。同様に、中途半端にではなく全力で神を信じなければならない。したがって、我々が神に捧げるべき愛や信頼を中庸に置くとするならば、これは重大な罪であるとボダンは言う。

ボダンは人間が神を愛し、神のみに頼むべきであることを繰り返し強調している。また、神は愛の対象であると同時に、畏れの対象でもある<sup>28</sup>。同一対象物に対して愛と畏れの感情をもつことが両立するかという疑問が呈されるが、これに対しては、その

---

<sup>26</sup> *Ibid.*, p.56.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.57.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.96.

ものを損なうことを強く畏れるということなしに誰かを愛することはできないとボダンは答える<sup>29</sup>。例えば、母親というものは自分の子供を極度に愛し、その子供に害を与えることを非常に恐れている。多少なりとも母親がもっているこの恐れは、我々が敵や暴君に抱く恐れとは違い心から愛する者に抱くものである。もし神への畏れが人間の心からなくなってしまうならば、神法も人定法も根こそぎにされ、すべての都市、帝国、社会は崩壊する。これらは神への畏れによってしか維持されないためである。というのも、もし君主や領主たちが命令を下す相手である役人だけを恐れるなら、彼らが悪事をなすことを誰が阻止できるだろうか。神への畏れはすべての帝国、国家、君主制の安泰にとって必要不可欠なものであるとボダンは考えていた。

### 3. ボダンの教育論

徳を獲得するためには、嘲笑的であったり邪悪であったりするような者たちとは行動をともにせず、有徳な人々に従い、徳高き行為によってのみ得られる真の栄光を手にすることに喜びを感じることを幼少期から習慣にすべきだとボダンは述べている<sup>30</sup>。具体的にどのような指針に沿って若者を教育したらよいか述べたものが『国家において若者に与える教育について、トゥールーズ市の市参事会と市民に対して行った演説』（1559年）<sup>31</sup>である。

ボダンは徳に寄り添いそれを補助するのが学芸や科学であり、これらなくしては幸せな生活はおろか単に生きていくことすらできず、若者たちが知的な文化と比類なき道徳を享受することで、国家のすべての共同体は繁栄すると述べている。そして、そのためには公教育が必要不可欠だと考えていた。子供たちは国家の未来を担う者たちであるから、彼らを集めて徳と学問を教えること以上に有益なことはあるだろうか、

---

<sup>29</sup> *Ibid.*, p.97.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p.92.

<sup>31</sup> *Id.*, *Le discours au sénat et au peuple de Toulouse sur l'éducation à donner aux jeunes gens dans la république*, dans Pierre Mesnard (trad.), *Œuvres philosophiques de Jean Bodin*, t. 1, Paris, 1951.

とボダンは言う。これは公共の利益にかなったことであり、それが打ち捨てられ顧みられなくなるなら、国家に大惨事すら招く。教育がしっかりと行われていないと法律の価値もまったくなくなってしまうとボダンは述べ、子供に教育を受けさせなかった両親に厳罰を命じたソロンの法に言及している<sup>32</sup>。教育をおろそかにして諸々の富を追求するならばそれはまったく賢明さを欠くこととなり、城壁や水道を整備しても若者への教育を怠った国家が繁栄することなど絶対にはないのである。

高度に教育を受けなくても徳を身につけることは不可能ではないが、徳に加えて神や人間に関わる学問を習得するのはさらにすばらしいことであり、「このような人々は不滅の神の力に最も近づいたとさえ言える」<sup>33</sup>とボダンは述べる。なぜなら、物事のことわりの中には神の力とその本性を考えさせるものが含まれているからである。ボダンにとって学問とは実用的な物事に関わるだけではなく、人が追求したり避けたりしなければならぬものを教えてくれるものでもあった。もし、人が読み書きすらできず何の学問もしないなら、動物と同じになってしまう。それゆえ、背教者ユリアヌスは学問が真実に奉仕することを知っていて、これをキリスト教徒たちに禁じたのであった。ボダンは無知が不敬神や誤った宗教の原因であると考えていた。

教育と学問の重要性について述べた後で、ボダンは公教育が私教育よりどれほど優れたものであるかを力説していく。当時トゥールーズには二つの教育システムが存在した。ひとつは家庭教師を家に呼んで行う私教育であり、もうひとつは子供たちをパリの学校（コレージュ）で学ばせるというものであった。後者についてであるが、パリに送られたまだあどけない子供たちは、鞭を手にした教師たちによって厳しく教育される。大都会に投げ出された孤独な彼らが、精神的にも物質的にも困窮し辛い目にあうのは火を見るより明らかである。それゆえ、彼らを手元に置き、トゥールーズの学校で学ばせた方がよいとボダンは言う。子供たちの心は脆く繊細なものであり、ほんの些細な苦しみが彼らの心を打ち砕くほどの破壊力をもってしまう。また、目下パリは内戦によって破壊される危険にさらされてもいる。子供たちに地元で教育を受け

---

<sup>32</sup> *Ibid.*, p.40.

<sup>33</sup> *Ibid.*, p.43.

させることによって、親たちは教育がどのようにほどこされているかを逐一知ることができるだけでなく、彼らが心身ともに健康であるかを把握することもできるのである。

次に、私教育との比較から公教育の優越が示される。そもそも家庭教師としてふさわしい人物を探すことはたやすいことではない。家庭教師に求められる教養のレベルは高度であり、自由学芸に通曉し、雄弁であり、ラテン語で文章を書くこと、ギリシア語を聞き取ること、最も洗練されたフランス語を話すことなどが要求される。ボダンによればこのような人物はほとんど見つけることは不可能であり、かつ見つかったとしても彼らの能力に見合った報酬を払うことは非常に困難だという。当然、公教育であれば、このような教師に国家が給料を支払い、多くの子供たちが同時に高度な教育を受けることが可能になる。

子供たちへの教育すべては、知性および道徳の形成に帰着するとボダンは言う<sup>34</sup>。まず、知性の形成について語られる。一般に、卓越した教師たちの心中には二つの目標がある。それは、物事をとらえ正確に考えること、そして自分の考えをうまく表すことを教えることである。前者は哲学、後者は修辞学の役割である。哲学は私教育においても教えることが可能であることをボダンは認めるが、公教育において教えられる方がはるかに勝るとした。優秀な家庭教師は子供のやる気を刺激し、子供もそれにあたる程度までは応えるだろう。だが、家という私的な場で二人だけで行う場合と、学校という公共の場で行う場合とでは教師の教える態度と子供の学習意欲の熱心さは同じではない。他の生徒たちの目があるので、教師はより熱心に教え、学生は同級生がいることによって無気力に陥らずやる気を保つことができる。同級生たちと競い合うことで能力は向上する。他方、私教育では能力のある子供であっても、孤立した刺激のない状況による弊害のために、無教養で愚かに育ててしまうこともありうるのだ。このことは他の学問分野についても言えるだろう。

---

<sup>34</sup> *Ibid.*, p.51.

弁論術に関しても、公教育で学んだ方がよりよい効果が得られる。たくさんの人々の前で弁論を披露することは、多くの称賛を得たいという欲求を刺激するため、学習にもより熱が入るからである。声の抑揚の付け方やしかるべき身振りや手ぶりを訓練し体得することは将来大いに役立つ。私教育でも読み書きや聞き取りの練習はできるが、弁論術に関しては公教育の場合のような効果は得られない。

私教育の重大な欠点は、子供たちが大人になって社会に出たときに露呈する。閉じられた空間で一人きりで教育を受けた彼らは、自らの臆病さに苦しむことになる。彼らは置かれた状況にうまく適応することができず、他の人々にどう思われるかを異常に気にしてしまい、称賛にすら耐えられず、ざわめきに恐怖を感じてしまうのだ。反対に、大胆で集団になじんで演説をする者もいるが、彼らは無礼な言動によって笑いものになってしまう。ボダンが社会性の獲得にとって幼少期の教育環境がいかに重要か知っていたのである。

また、社会においてそれぞれの才能にふさわしい役割を割り当てるということも、私教育は不可能にしている。軍隊では屈強な軍人になるべき候補者には厳しい試験が課される一方で、将軍には気高い精神をはじめとした必要とされるすべての素質が求められる。どうして知性の選択においても同様のことを行わないのだろうかとボダンは憤りを見せる<sup>35</sup>。なぜなら、学校という場があってこそ、それぞれの能力の程度や優劣が明らかとなり「知性による選抜」ができるからだ。このような議論の末に、ボダンは文芸に関しては私教育に効果はないと結論づける。

次に道徳形成についてであるが、これは教育の第二の目的であり、敬神へと導く善き習俗の尊重や維持にとって重要なものであり、文化を形成する文芸以上に細心の注意をもって取り扱うべき事柄だとされる。家庭での教育が程よくなされるということではまれだとボダン言う<sup>36</sup>。なぜなら、厳しくしすぎるか甘やかすかのどちらかになってしまう傾向があるからである。両方とも有害であることは言うまでもない。なぜなら、

---

<sup>35</sup> *Ibid.*, p.53.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p.54.



厳しくしすぎた場合は、子供たちは恐怖にとらわれ、すっかり勇気をなくし臆病者になってしまうからだ。あるいは、子供が生まれつき頑な性格だった場合に親がそれを和らげようとするのではなく、強制して打ち砕いてしまうと、子供は親に反抗的になりますます性格が悪くなってしまいます。その反対に、子供たちを甘やかして彼らの言うことに従ってばかりいると、子供たちは傲慢になり親や教師たちを軽んじ、どんどん墮落していく。甘やかすことと自由を尊重して育てることとは違うのである。家庭での教育の主導権を握っているのは母親をはじめとした女性たちであるが、彼女たちは過度の寛大さを子供たちにもっているために彼らのわがままを聞いてしまうのだとボダンと言う。その結果、彼らは欲望によって支配され、自分の感情のままにふるまう人間になってしまい、教師が学問の素晴らしさを説いたところで聴く耳など持たないのである。

思慮深く、節度を保ち、寛大で勇敢な精神を形成するためには、どちらかといえば厳しく教育することが好ましいとボダンは考えていた。家族の中の女性たちに甘やかされることや家でののんびりした生活、飲酒やぜいたくな暮らしは精神を墮落させるため、子供たちにとって有害である。質素で禁欲的な生活に耐えてこそ、自然の欲求を理性に従わせることができるようになるのである。

徳育と知育に関してどちらかのみを重視する者が多くいる一方で、知育に徳と敬神を結合させようと模索する者は非常にまれだとボダンは言う。文芸の教育と敬神を切り離して考えている者も多く、あたかも国家の運命がそこにかかっているかのように、彼らは雄弁術や問答法の重要性だけを世間に広めている。若者の教育がまるでこれらの精緻な議論に終止し、敬神や徳、善き習俗には関わらないかのように彼らは指導を行っている。だが、清廉潔白な良心の伴わない知性ほど有害なものはないとボダンは言う<sup>37</sup>。無知は不幸であるが知識を活用できないことはそれ以上に不幸である。だが一番不幸なのは、本来善きことのために用いる知識を悪のために用いることである。そしてこの最大の不幸は学問についての誤った観念をもち、何の道徳も身につけていない者たちが、子供たちに不適切な作家たちについて分別なく学ばせることである。

---

<sup>37</sup> *Ibid.*, p.56.

そのような者たちは子供たちに神や悪霊、運命、自然、最高善について書かれた哲学の本をまるで宗教がまったく重要でないかのように、宗教と照らし合わせることなく説明する。これは重大な過ちであり、これ以上に国家や法律、善き習俗にとって災いとなるものはない。私教育において家庭教師が適切な著作を選び慎重に解説を加えることは可能であるが、それを法律で伸長したりあるいは規制したりすることは不可能である。これに対して、公教育ではそれぞれの教師がとりあげる詩人や哲学者、それらに加える留保や解説を検閲することができる。すべての市民の子供たちは親の属する社会階層に関係なく、一様に公立の学校で学び、それぞれの適性が伸ばされるべきだとボダンが主張する。

国家における共通善は、聖俗の秩序両方に関して常にすべての市民が意見を同じくすることにあり、これは人間社会とすべての公的生活の終局目的であるとされる。すべての国家の法律、すべての民族の宗教や信仰、すべての役人の権能、要するにすべての制度が目指す目的はひとつである。すなわち「人間に相互の愛情と信頼の中で幸福な生を可能にすること」<sup>38</sup>である。したがって、国家において社会的絆を強めるためには同一の教育を子供たちにほどこすことが最も重要である。聖なる秩序に関しても、すべての市民のあいだで信念の完璧な一致を実現することが必要である。子供のころから同じ教育を受け、同じテキストを学び、同じ習慣を身につけ、同じ神を讃えるのでなければ、同じ聖なる秘密に通じ同じ教義を保つことはできない。このような一体性を私教育からは望みえず、それどころか、国家におけるすべての悪の源泉となっているのは、若い頃に受ける教育の多様性にあるとボダンは言う。真の宗教として教えられるものがそれぞれ異なり、まして真の宗教などないと教えられたならば、信条の一致など保てるわけなどないからである。

その結果、多くの党派が生まれ、党派同士での争いが起こるのは言うまでもないが、ひとつの党派内においてもひとりのリーダーの下に一致団結していない場合には不和が生じる。「ここからひどい動乱、怨恨、論争、反目、敵意、不平不満、誹謗、反逆が確実に生じており、さらには陰謀、内戦、都市の略奪、国家の転覆や要人の暗殺が

---

<sup>38</sup> *Ibid.*, p.57.

起きている」<sup>39</sup>。このような現在進行中の不幸の連鎖を断ち切るためには、若者がしかるべき教育を受け共通の教義を学ぶことが必要だとボダンは考えていた。

公教育においては友愛も育まれることになるが、これは国家をはじめとした公的な共同体や家という私的共同体、つまり人間的な生の営みを成り立たせて維持するために最も強い絆である<sup>40</sup>。すべての公共善と人間同士の結合は神的秩序と人間の作った秩序を二つの支柱としており、これらはそれぞれ宗教と友愛が人々のあいだに定着することによって保たれる。神的秩序にのみ関心を持ち、世俗の秩序には無関心である者、あるいはその反対に、世俗の秩序にしか関心をもたない者もいるが、ボダンはこの二つの秩序は相関関係にあると考えている。つまり、片方の援助なくしてもう片方の安定はなく、どちらかが崩壊するともう片方も巻き添えになってしまうのである。ここに政治学者としてのボダンの優れたバランス感覚を看取することができよう。

## おわりに

国家論において顕著に見られるように、ボダンの思惟様式は神への信仰と神を中心とした伝統的な宇宙観に深く根差したものであった。これは、道徳や教育についての議論においても同様に見られる。ボダンの徳論においては、神から授かった理性の種を人間は容易に育てることができるという人間の理性への信頼が説かれている。このことは、人間という存在への根源的な肯定をも導くものともなろう。とはいえ、このような理性を有するものの、人間は自由意志により自らの在り方や行動を選び取っていく存在でもある。理性が常に正しいものであるのに対し、自由意志は悪を選択することもある。だからこそ、無方向性を特徴とする自由意志を正しい方向に導くためには、理性をより研ぎ澄ますべく鍛錬することが必要となる。

---

<sup>39</sup> *Ibid.*, p.58.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p.59.

そのために必要とされるのが幼少期からの適切な教育である。ボダンには知育と徳育の両方の重要性を説き、それらを結びつけた教育がなされるべきだと考えていた。知育は実践面で役立つものを、徳育は善き人間形成を主眼とする。そして、この両方に関わるのが敬神という要素である。一つの宗教の下で、友愛に基づいた社会が営まれることをボダンは理想だと考えていた。このような社会は彼の生きていた現実とは真逆のものである。当時のフランスではカトリックとプロテスタントが激しく対立し、人々のあいだには不和と憎悪が蔓延していたからである。

400年以上前に書かれたものではあるが、ボダンの教育論から現代を生きる我々が学ぶところは少なくないように思われる。子供の教育はいつの時代にあっても難しい問題である。だが、基本原則は存在する。例えば、ボダンも述べているように、幼少期からある程度の厳しさを備えたしつけは必要である。「個人の自由」と他人の迷惑を顧みない自分勝手をはき違えたような大人が増殖しているのは、幼少期からの甘やかしや放任によるところも大きいのではないだろうか。家族の在り方も様々であり多様な価値観が認められている現代社会において、道德教育は焦眉の問題である。とはいえ、生きる時代や環境が違っていても人として生きていくために遵守すべき原則は常に単純なものだとも言える。ボダンの場合はそれが十戒を中心とした神の掟を守ることにより集約されていた。神の掟に記されていることは、全人類にとっての普遍的な教えとなるものも少なくない。例えば、汝殺すなかれ、汝盗むなかれ、といったような命令である。このような普通に生きていけば当たり前だと感じるような禁止条項、あるいは人として当然なすべき事柄の遵守が道德教育の場で改めて教えられる必要があるだろう。そして、こういった教えを授ける教師には知性においてのみならず、徳性においても十分な資質を有することが要求されよう。

また、今日では高度な情報技術の発達と普及によって、人と顔を合わせることなく様々な知識や経験の獲得が可能となった。それ自体に関しては、大変喜ばしいことである。だが、子供たちが集まって共に学ぶ学校という場の重要性をボダンのテキストは改めて感じさせるものであった。文明の利器の活用と人間同士が直に関わりあって学ぶという伝統的な学習方法をうまく組み合わせることで知育と徳育の双方をバランスよく

行い、豊かな人間性を形成していくことが今後ますます重要な課題となるだろう。ともすると知育に傾きがちであるとの印象を禁じ得ない現代の教育事情に思いを巡らすとき、徳の伴わない知性ほど有害なものはないというボダンの言葉を我々は改めて肝に銘じる必要があるのではないだろうか。科学技術が日々目覚ましい進歩を遂げる中で、それを行使する人間のモラルもより一層陶冶されるべきである。